

「日本語A：言語と文学」指導の成果と課題

日本語A 石井 光貞

1 要旨

昨年度 IB 1 期生を対象にアンケートを実施し、本科目の指導の成果と課題点を明らかにした。本年度も同内容のアンケートを 2 期生（以下、生徒）に実施し、昨年度浮き彫りになった課題点が改善されているか等、1 期生と比較しながら生徒の 2 年間の学びを振り返る。

昨年度と比較すると全体として肯定的な回答が増加している。特に多くの生徒が科目のねらいを達成できたと感じている。一方、コア科目等との教科横断的な学びの実感は改善傾向にあるものの、依然として課題があることがわかった。

2 アンケートの詳細と結果

アンケートは、2 年間の学習を通して、①学習のねらいをどの程度達成できたか、②科目はコアや IB の理念等とどの程度関連性を持っていたか、③最も成長した（力がついた・学びが深まった）ことは何か、の 3 点を明らかにするために実施した。①と②のアンケート項目は『「日本語A：言語と文学」指導の手引き 2021 年第 1 回試験』を基に作成し、回答は「全く思わない」「あまり思わない」「思う」「非常に思う」の 4 択とした。また、③は記述式として実施した。

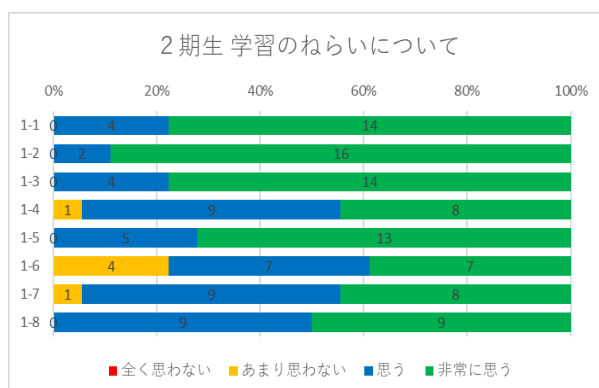
アンケートは最終試験終了後の 2022 年 12 月中旬に実施し、18 名の生徒から回答を得た（昨年度は 22 名の生徒から回答）。以下はその詳細と結果である。

2.1. 学習のねらいについて

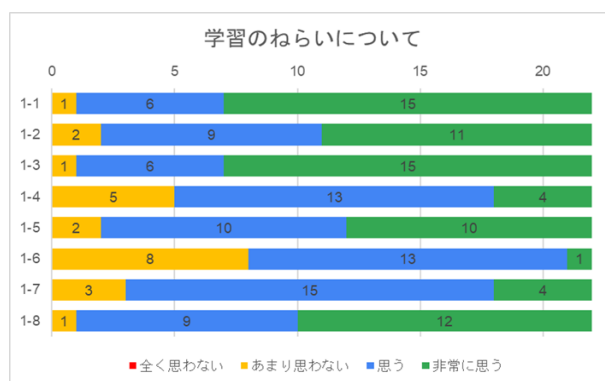
アンケート項目とそれに対する回答結果は以下の通りである。

- | | |
|------|--|
| 1-1. | さまざまな媒体や形式、異なる時代、スタイル（文体）、文化からの多様なテキストに触れることができた |
| 1-2. | 話す、読む、書く、見る、発表する、およびパフォーマンスのスキルを伸ばすことができた |
| 1-3. | 解釈や分析、評価のスキルを伸ばすことができた |
| 1-4. | テキストのフォーマルで美的な性質への感性を磨き、またそれらがどう多様な応答や複数の意味をもたらすのかを鑑賞できるようになった |
| 1-5. | テキストと多様な価値観、文化的文脈、地域とグローバルな問題との関わりについて理解を深め、またそれらがどう多様な応答や複数の意味をもたらすのかを鑑賞できるようになった |
| 1-6. | 「言語と文学」と他の教科の関係性への理解を深めることができた |
| 1-7. | 自信をもち、創造的な方法でコミュニケーションをとり、協働することができた |
| 1-8. | 言語と文学に対して、関心と喜びをもつようになった |

2 期生 学習のねらいについて



昨年度参考) 1 期生 学習のねらいについて

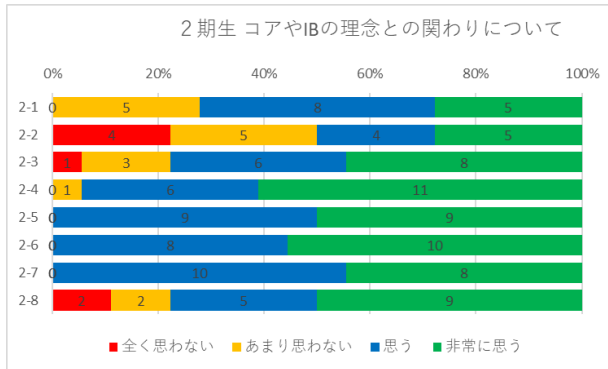


2.2. コアや IB の理念等との関わりについて

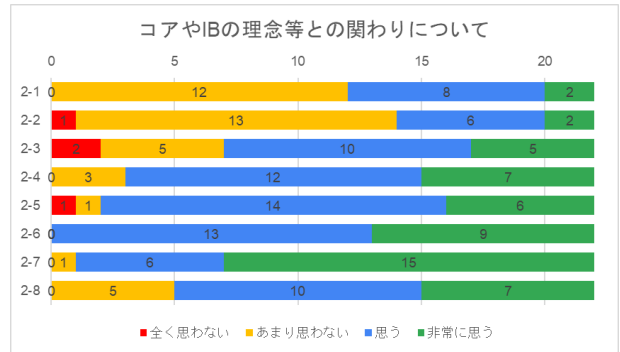
アンケート項目とそれに対する回答結果は以下の通りである。

- 2-1. 知識の獲得や構築、受容等について、TOK と「日本語 A：言語と文学」の学びを関連付けることができた
- 2-2. 「日本語 A：言語と文学」で学んだことや身に付けたことを実社会に応用・転移し、CAS に活かすことができた
- 2-3. 「日本語 A：言語と文学」のコースで培ったリサーチスキルやライティングスキル、創造性などを EE に活かすことができた
- 2-4. 「日本語 A：言語と文学」のコースを通して、自己の観点と異なる価値観に触れ、国際的な視野を養うことができた
- 2-5. 「日本語 A：言語と文学」のコースを通して、IB の教育理念（IB の使命や IB の学習者像など）を実践・体現することができた
- 2-6. 「日本語 A：言語と文学」のコースを通して、ATL スキル（思考スキル・社会性スキル・コミュニケーションスキル・自己管理スキル・リサーチスキル）を身に付けたり、伸ばしたりすることができた
- 2-7. 「日本語 A：言語と文学」のコースを通じて、学問的誠実性を貫くことができた
- 2-8. 学習者ポートフォリオは、学習を振り返ったり、学習内容を整理したり、評価課題の準備をしたりすることに役立てることができた

2 期生 コアや IB の理念との関わりについて



昨年度参考) コアや IB の理念との関わりについて



2.3. 記述式アンケートについて

質問項目を「最も成長した（力がついた・学びが深まった）ことは何ですか。それを実感した単元や学習活動等を含めて、具体的に教えてください」とし、本科目の学びに関して自由な回答を募った。紙幅の都合ですべてを掲載することはできないが、以下は代表的な回答である。

- 批判的思考力が身についた。単元末課題、Paper1、IA 全てにおいて必要なスキルであり、他者との意見交換を通して身につけることができた。ディスカッションをすることによって新たな視点を獲得ことができ、自分が本来持っていた価値観から一回遠ざかって客観的に見直すことができた。そして、より説得力と分析力が深まった考察を行うことができるようになった。
- 最も成長したと感じたのは、『三四郎』の単元のプレゼンである。自分達で問いを見つけるのは難しかったが、それによって文学を深く読み、その背景や工夫にも注目できた。また、プレゼンはうまくいかなかった部分もあるが、それも含めて今後何を改善すべきか考えるきっかけになった。
- 最も成長したことは、ポスター・広告・文学などにおいて、作者のメッセージや意図、そしてそれらを伝えるための工夫とその効果を発見・分析できるようになった点です。これは、Mock や最終試験直前の、演習を繰り返した

際に身についたと考えています。先生が提供した全ての演習問題に取り組み、毎回クラスメイトとピアリーディングをし合ったことで、成長を実感することができました。

- 批判的に分析を行うことが最も成長した点だと感じる。最初に批判的な分析を行ったのが、『青い目が欲しい』の小説をみんなで話し合った時であり、異なる視点を踏まえて自分の意見を形成できるようになった。また、自分が注目できなかった分析的観点を他の人の話を通じて理解できたり、自分の意見を説得力のある方法で共有したりすることができた。また、この分析スキルは、英語の文章や理系科目のデータ分析などで批判的に考える時に応用することができた。”
- IA 対策です。これまで自分の意見を口頭で述べることは多くあったけれど（プレゼンなど）、話しているうちに論点からズレてしまうことが度々あった。しかし、日本語の IA はグローバル問題がどのように表現されているかという問いに対して一貫性を意識しながらプレゼンすることができました。言語と文学の IA を踏まえて自身の意見をいかに説得力があるものとして伝えることができるかということをそれまで以上に考えるようになり、最終試験後に行ったディベートや志望理由書を書く時に実感できたと思います。他の人との議論や、別の教科で文章を書く際に役立てようと思います。
- 自分の意見を伝えるうえでの整理能力が上がったと考えている。ファイナルに近づくにつれ、ペーパー1の演習問題がたくさん出され、その課題を何度もこなしていた。何度も自分の意見をそれぞれのテキストに合わせて書くことによって、自然と自分の意見をきれいに整理し、まとめる能力が格段に上がった。多分、何度も書いていくだけでなく、書きたびにクラスのみなどと見せ合いっこをすることによって他からのアドバイスをもらい、そのアドバイスを元に自分はどのように改善していったらいいのか、どこをもっと伸ばしていけばいいのかを理解することができた。
- 自身が広告や映像、写真などを見た際に生まれた「感情」を言語化するための論理的思考力を身につけることができたと思う。これは、P1を描くうえで、レトリックや文章の語尾、文字の大きさ、色使い、口調、フォント、構成など様々な観点から自分の言いたいことに対するアプローチを行い、きちんと序論、本論、結論を意識して書いたことから言える。
- 文学作品や非文学作品が何を伝えたいのか（主題）理解する学びを深めることができた。今まで作品で表面上に書いてある、直接的な主題しか明らかにすることができなかったものの、日本語の授業を通して暗示されている主題や間接的に書かれてある主題について分析することができるようになった。そのことにより、作者が本当に伝えたいことをより理解することができ、作品を深く見ることができるようになった。特にそれを実感したのは街中にある広告や映像を見た際に、主題や作者の意図について無意識のうちに考えるようになったことだ。ポスター（非文学作品）の分析を行なっている際だったため、より身近なポスターについて考えるようになった

3. 成果と課題

1-1～1-8 すべての項目で肯定的な回答が 95.8%と大部分を占めており、多くの生徒が学習のねらいを達成できたと感じていることがわかった。昨年度の肯定的な回答が 86.9%であった点から見ても、達成感を感じている生徒の割合が増加している。また、2-1～2-8 の項目では肯定的な回答が 84.0%であり、昨年度の 75.0%から増加している。そのうち、2-4～2-7 の項目において「非常に思う」「思う」の回答数がほとんどであり、国際的な視野や IB の教育理念、学問的誠実性について、身に付いたり伸ばしたりできたと実感している生徒が多いこともわかった。特に 2-5～2-7 は「思わない」「全く思わない」の回答が1つもないため、すべての生徒が科目を通して ATL スキルの伸長、IB 理念の実践、学問的誠実性の遵守についての実感を得ていたようである。昨年度と比較しても「非常に思う」と「思う」のみ回答の項目数が1から3に増え

ているなど、全体として改善傾向にあるといえる。

一方で、コア科目や他教科との関連性には昨年度から引き続き、課題があることが明らかとなった。項目 1-6 「言語と文学」と他の教科の関係性への理解を深めることができた」については、「あまり思わない」の回答率が 22.2%であった（『全く思わない』の回答数は 0）。昨年度が 36.4%であったことと比較すると改善傾向にあるが、依然として課題が残っている。また、2-1 「知識の獲得や構築、受容等について、TOK と「日本語 A：言語と文学」の学びを関連付けることができた」、2-2 「『日本語 A：言語と文学』で学んだことや身に付けたことを実社会に応用・転移し、CAS に活かすことができた」に関しても、昨年度よりも改善傾向が見られるものの、他の項目と比べると否定的な回答が多く、特に 2-2 の CAS との関わりに関する項目について否定的な回答が半数を占め、「全く思わない」と回答した生徒の数は昨年度が 1 であったのに対して、本年度は 4 と増加している。さらに、「2-8. 学習者ポートフォリオは、学習を振り返ったり、学習内容を整理したり、評価課題の準備をしたりすることに役立てることができた」の項目については「全く思わない」の数が 2 と、昨年度より増加している。

本科目としては、昨年度と比較すると全体として改善傾向にあるが、科目での学びを他科目に活かしたり、他科目で身に付けたことを本科目に役立てたりすることへの指導、およびポートフォリオの活用についてさらなる改善の余地があると言えそうである。

年度途中で担当者が入れ変わったこともあって前年度の反省を活かしているかどうかの指導者側からの検討ができないが、生徒のアンケートを見る限り、前担当者が 1 期生での経験を活かしつつ指導にあたり、一定の結果を出せているのではないかと推測される。執筆者が 1 期生から 2 期生にわたる単元計画等の変遷を見る限りにおいても、より明確な指導目標が生徒に提示され、また、指導内容は最終試験に最適化されつつあり、本校における日本語の指導は着実に進歩していると実感している。

4. 今後の展望

本稿の執筆段階でまだ最終試験の結果が出ていないため安心はできないが、アンケートで肯定的な評価が得られた学習のねらい等については、今後も確実に達成していけるように努力を続けていきたいと考えている。

一方、今回明確になった課題、特にコア科目との関連性については、単元のなかで TOK の「知識と言語」や AOK「芸術」「人間科学」の問いを取り上げたり、本科目に関連するどんな活動が CAS になるかを紹介したりすることで、生徒が関連性を実感できるように繋げていきたい。また、3 期生から最終試験がフルパッケージとなり、試験問題 2 が復活する。以前にも増して学習者ポートフォリオの活用の必要性が高まるため、ことあるごとにポートフォリオを活用するよう生徒には意識づけしたい。さらにバウンダリーもコロナ前の基準に戻ることが予想されており、本校における IB 生への指導の真価が試される年度となることが予想される。これまでの科目指導の蓄積をよりよい学びの場づくりの提供に活かしていきたい。さらに、IB コースのカリキュラムは新学習指導要領（平成 30 年告示）との親和性が高いこともあり、ここで得た知見や指導法を国際科生への指導に活かせるよう教科内で共有していきたい。